

鯨 研 通 信



第406号

2000年6月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番18号 東京水産ビル 電話 03 (3536) 6521 (代表)
 HOMEPAGE 日本語 <http://www.icrwhale.org> 英語 <http://www.whalesci.org>

◇ 目次 ◇

鯨類捕獲調査における海洋観測	松岡耕二	1
アイヌ民族のクジラ利用文化	岩崎・グッドマン・まさみ、野本正博、藤島法仁	10
日本鯨類研究所関連トピックス (2000年3月～2000年5月)		18
日本鯨類研究所関連出版物等 (2000年3月～2000年5月)		19
京きな魚 (編集後記)		24
ストランディングレコード (1999年11月～2000年4月受付)		25

鯨類捕獲調査における海洋観測

松岡耕二 (日本鯨類研究所)

1. はじめに

近年、国際捕鯨委員会科学小委員会 (IWC/SC) においても、従来の鯨類資源管理研究に加え、生態系総合調査や複数種一括管理を合い言葉に、鯨類を取り巻く海洋生態系全体の解明に関心が高まっており、当研究所も1990年代後半から、新しい海洋観測システムや計量魚探解析システムの導入に力を注いできた。海洋環境は鯨類の餌生物 (カラヌスやオキアミ類、魚類、イカ類等) 分布と密接な関係にあることが知られており、海洋構造の解明は、調査海域内の鯨類分布や海洋生態系解明にとって不可欠であるばかりでなく、毎年の観測によって海洋環境の長期的モニタリングが可能となる。一方で、従来の目視・生物調査の質を維持しながら、限られた調査期間で如何に新しい観測システムを活用

していくかについての課題も残っている。

当研究所が南極海および北西北太平洋で実施している鯨類捕獲調査 (それぞれJARPA、JARPN) では、調査開始当初から主要な調査である目視、生物調査と並行して海洋観測を実施してきたが、近年の海洋観測機器の多様化、高性能化に伴って、その運用も大きく変化してきている。本報では、鯨類捕獲調査における海洋観測実施状況とその成果について紹介する。

2. 調査船と海洋観測機器の変遷

現在、海洋観測は第二共新丸 (図1) と勇新丸 (図2) が実施している。JARPA及びJARPNでは、調査母船日新丸の他に4隻の調査船が活動し、通常は船団と独立して目視調査を行う第二共新丸が先行し、その後方で3隻の

標本採集船と日新丸が捕獲活動を行っている。本年6月現在の各調査船の海洋観測機器（航海計器を除く）を表1に示す。なお計量魚探、研究室の有無、調査員の人数は、調査実施面で海洋観測機器と密接な関係にあることから、参考として表に載せた。

XBT, XCTDシステム

XBTシステムは航行中の調査船よりサーミスタと細い導線のセットされた水温測定プローブを投下して、船上のパソコンで水温の鉛直分布データを処理するシステムである。プローブには水深300m、460m、760m、1830m用があるが、JARPA/JARPNでは開始当初から760m用（船速15ノット以下で使用可能）で観測を行ってきた。

1997年秋から導入したXCTDシステムはXBTに電気伝導度（塩分）測定機能が追加されたものであり、プローブは現在1,000m用（船速12ノット以下で使用）のみが製造されている。XBTと比較して塩分計測が可能になったことから、海洋観測の精度が飛躍的に向上した（Mizuno and Watanabe, 1998）。

XBT, XCTDともに目視調査中（通常は船速11.5ノット）でも観測が可能なることから、CTD（後述）のように海洋観測のために停船する必要がなく、貴重な調査時間を目視調査に集中することができ、非常に有効である反面、高価であるという難点を持っている。目視調査を最優先させる南大洋鯨類・生態系調査（IWC/SOWER）

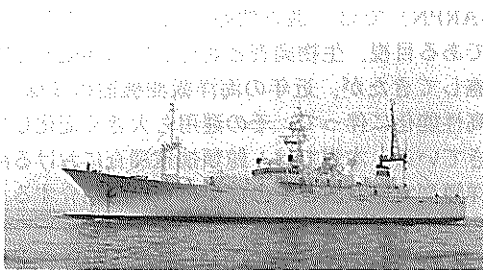


図1. 第二共新丸（だいにきょうしんまる）。鯨類目視調査に必要な設備はもちろんのこと、XCTD、EPCS機器を搭載。目視調査を行いながら海洋観測、餌生物現存量調査（SIMLAD）を同時に行うことができる、世界で唯一の鯨類目視調査船（共同船舶株式会社提供）。

では、観測に時間と労力を要するCTDによる観測は見送られている。

CTDシステム

メモリー式CTD（SBE-19）による観測は、現在勇新丸において実施されている。観測は停船した状態でを行い、ウィンチとワイヤーにより観測機器を所定の水深まで投入後、再び観測機器を揚収し、パソコンによってデータを回収する。他に蛍光光度計の併用（水深最大600mまで）が可能である。観測水深はその都度調整可能であるが、500m観測で約40-50分程度を要するため、目視調査を最優先するJARPA/JARPNでは自ずと観測回数等が制限される。なお、観測精度を維持するため、定期的な較正が必要である（通常年1回米国製造元で実施）。

EPCSシステム

船底から取り込んだ海水の流量、水温、塩分、植物プランクトン色素、溶存酸素、観測日時、観測位置を連続的に観測し、表層生物環境をリアルタイムでモニタリングするシステムで、海水流路系部とデータ処理部から構成されている。電気伝導度センサーはCTDと同様に年1回の較正が必要となる。連続データを集集できることから、従来観測されなかった表層の小さい潮目などの海洋環境変化を把握することが期待される。現在第二共新丸と勇新丸に装備されている。



図2. 勇新丸（ゆうしんまる）。鯨類の目視調査と捕鯨装備を備えた標本採集船。XCTD、CTD及びEPCS機器が搭載可能であり、目視調査と海洋観測を同時に行うことができる（共同船舶株式会社提供）。

3. 海洋構造と鯨類の分布

JARPA/JARPNでは、海洋データと鯨類目視データを同時に収集できる利点があり、同時期の海洋構造と鯨類の分布をより詳細に把握することが可能となる。

3.1 JARPA

JARPAでは1987/88年度から1996/97年度までXBTによる観測を実施した。その成果は毎年IWC/SC等に報告され (Naganobu *et al.*, 1995)、当研究所の生態系研究室においてXBTデータベース整備作業が進められている。1997/98年度からはXCTDによる観測が行われ、遠洋水産研究所低緯度域海洋研究室の協力の下に、観測効果、観測点設定方法等を検討するための予備解析が進められている。表2にJARPAにおける機器別海洋観測点数の一覧を示し、以下にその成果の一部を紹介する。

1) 南極周極流の観測

1997/98年度調査では、1997年12月から翌年3月までの期間に南緯60度以南、東経35~130度間の広大な調査海域を対象に、第二共新丸が目視調査中に計93点のXCTD観測を実施した。解析の結果、調査海域内の沖合いを東向流する南極周極流の南側境界は、概ね南緯63~65度付近に位置し、東経80~100度間ではこの境界が南緯61度付近まで蛇行しながら北上しているのを確認した (図3 a)。この南極周極流の南側境界の存在は、従来のXBT観測では特定が困難であり、XCTD観測の成果であるといえる。

南極大陸を時計周りに流れる南極周極流の南側境界付近の海域は、豊富な栄養塩を含む環南極深層水の湧昇域として知られ、オキアミ調査や商業捕鯨時代の捕獲記録などの解析によってヒゲクジラ類やマッコウクジラの分布との関連が指摘されていた (Tynan, 1998)。また、水産庁「開洋丸」や南極地域観測隊「しらせ」による観測では、本海域では海底地形と湧昇流の影響によって、南緯64度付近に長径約500 km規模の南北につぶれた形の渦が東西に並んで定常的に存在し、南極周極流の一部が蛇行しながら割り込んできていることが明らかになっている

(若土, 1993)。

今回観測された南極周極流南側境界の大規模な蛇行は、ケルゲレンプレート南端の海底地形の影響によるものと考えられたが、上記渦の特定には至らなかった。1999/2000年度調査では、北部海域における定点観測と観測点の増加による観測精度向上が課題となった。

2) 南極周極流南側境界と主要鯨類の分布

南極周極流南側境界周辺の主要鯨種の分布を明らかにするため、1997/98年度調査で発見された主要鯨類について検討した。

ザトウクジラは、この境界が大きく蛇行する東経80~120度間に集中して分布し、特にこの境界付近に沿って密度指数 (100マイルあたりの発見頭数) が高くなる傾向が見られた。ミンククジラは、調査海域全体に広く分布するが、特にこの境界の南側で密度指数が高くなる傾向が見られた。シロナガスクジラ、ナガスクジラ、セミクジラについては、発見数が少ないために

表1. JARPA/JARPNに従事する調査船の観測調査関係装備一覧表 (2000年6月現在)

調査船	XBT/XCTD	CTD	EPCS	計量魚探	研究室	調査員 人数
第二共新丸	○	-	○	○	○	2
勇新丸	○	○	○	-	○	1
第一京丸	-	-	-	-	-	1
第25利丸	-	-	-	-	-	1

表2. JARPAにおける機器別海洋観測点数一覧 (EPCSは第二共新丸と勇新丸の合計稼働日数)

年度	XBT	XCTD	CTD	EPCS
1987/88	67	-	-	-
1988/89	56	-	-	-
1989/90	78	-	-	-
1990/91	91	-	-	-
1991/92	88	-	-	-
1992/93	95	-	-	-
1993/94	95	-	-	-
1994/95	94	-	-	-
1995/96	98	-	-	-
1996/97	90	-	-	-
1997/98	-	95	-	-
1998/99	-	93	66	78日
1999/2000	-	123	87	214日

分布の傾向をみることは難しいが、セミクジラは発見水域が東経80~120度間に限定されるようにとれる(図3b)。マッコウクジラおよびミナミトックリクジラは、調査海域全体に広く分布しているが、特に東経80~110度間の大陸棚斜面上に分布する傾向が見られた。シャチは調査海域全体に広く分布するが、主に氷縁付近で密度指数が高くなる傾向が見られた(図3c)。

東経80~120度間の海域は、海底地形と南極周極流の影響によって豊富な栄養塩を含む環南極深層水の湧昇域が存在し、大量のオキアミ類やイカ類の存在が想定される。さらにザトウクジラをはじめとするいくつかの鯨種は、この海域を重要な餌場としている可能性が示唆された(Matsuoka *et al.*, 1999)。

3) 調査方法の改良と今後の課題

1997/98年度調査では、目視調査を最優先とし、1日1回任意の点でXCTD観測を実施したが、検討の結果、観測点の間隔を極力一定にすることや調査海域を均一にカバーする必要性が指摘された。

1998/99年度調査から、計量魚探搭載に伴う調査員2名体制となったことを機に、あらかじめ設定した観測点において正確に観測を行う方式に変更して、観測精度の向上に努めている。また、EPCSを用いた表層のクロロフィル密度分布データによる湧昇域の特定や計量魚探解析結果との照合についても作業を進めており、さらに1999/2000年度の解析では、1997/98年度との比較を含めて行う予定である。

3.2 JARPN

1994~1999年度の海洋観測網は、東経170度以西の西部亜寒帯循環域をほぼカバーしていることから、本データはミンククジラの生息環境を明らかにするのみでなく、海洋構造の長期変動を把握する上でも貴重であるといえる。海洋学の視点から見ると、北太平洋の亜寒帯循環域は、半球規模の気象海洋変動と密接な関係を持ち、長周期変動の卓越する海域である(Watanabe and Mizuno, 1994)。ここでは最も多く観測が行われた沖合い海域(東経157-170度間; 9海

区)の海洋構造とミンククジラの発見分布について紹介する。

1) 沖合い域の海洋構造

1994年、95年には西部亜寒帯循環の中心部を広く覆う観測を実施し、96年、97年、98年には西部亜寒帯循環の南部の前線域を中心とした観測を実施した。表3にJARPNにおける機器別海洋観測点数を、図4に観測点を示した。

北西太平洋の中高緯度海域では、北海道東方の北緯40度、東経150度付近と、北緯41度、東経165~170度付近に特に強いフロント構造が現れることが知られており、前者は親潮フロント、後者は亜寒帯境界とよばれ、共に亜寒帯系の低温、低塩分水と南側に存在する亜熱帯循環系の高温、高塩分水の境となっている。今回の海洋観測からもこれらの海域で水温の南北傾度が強くなり、水温前線が存在することが観測されている(Watanabe *et al.*, 2000)。

2) 海面水温の季節変化

沖合い域の季節変動を調べる目的で、海面水温の季節変化(緯度毎)を調べた。水温の南北勾配の強い位置は一年を通じて移動することがなく、上記の亜寒帯境界の季節変動は小さいことがわかった。鯨が発見されやすい11°C前後の海面水温に着目すると、この水温帯は、1月から5月までは、北緯40度付近にあり、ほぼ亜寒帯境界の南側に位置する。6月にかけてゆっくりと北上し、北緯42度に達する。7月以降急激に北方へ拡大し、8月には調査海域全体の海面水温は10°C以上になる。この海面水温の変化は、この海域で発見されたミンククジラの北上回遊に対応するものと考えられる(図5)。

表3. JARPNにおける機器別海洋観測点数一覧(EPCSは第二共新丸における稼働日数)

年度	XBT	XCTD	CTD	EPCS
1994	62	-	-	-
1995	58	-	-	-
1996	65	-	-	-
1997	63	-	-	-
1998	-	51	-	-
1999	-	42	22	32日



図 3 a. JARPA-1997/98におけるXCTD観測点(白丸)と海底地形図。実線は観測された南極周極流南側境界を示し、その北側を南極周極流が東向きに流れている。破線は衛星写真と調査船からの観測情報により推定した氷縁ライン。



図 3 b. JARPA-1997/98において観測された南極周極流南側境界(実線)と発見されたヒゲクジラ類の緯度経度1度グリッドごとの密度指数(100マイルあたりの発見頭数)。破線は衛星写真と調査船からの観測情報により推定した氷縁ライン。

上図: ザトウクジラ、下図: ミンククジラを示す。

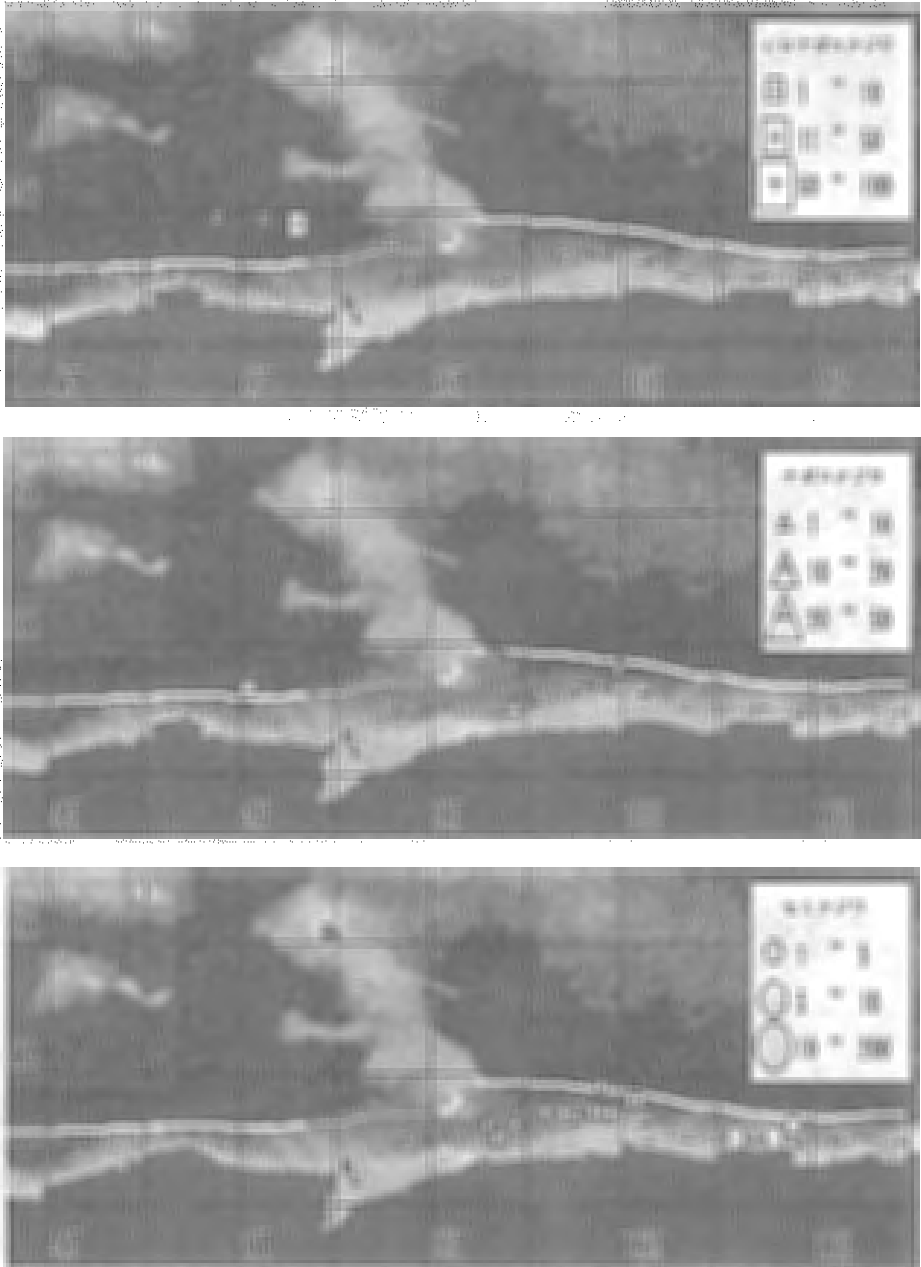


図3 b. (続き)。上図：シロナガスクジラ、中図：ナガスクジラ、下図：セミクジラを示す。

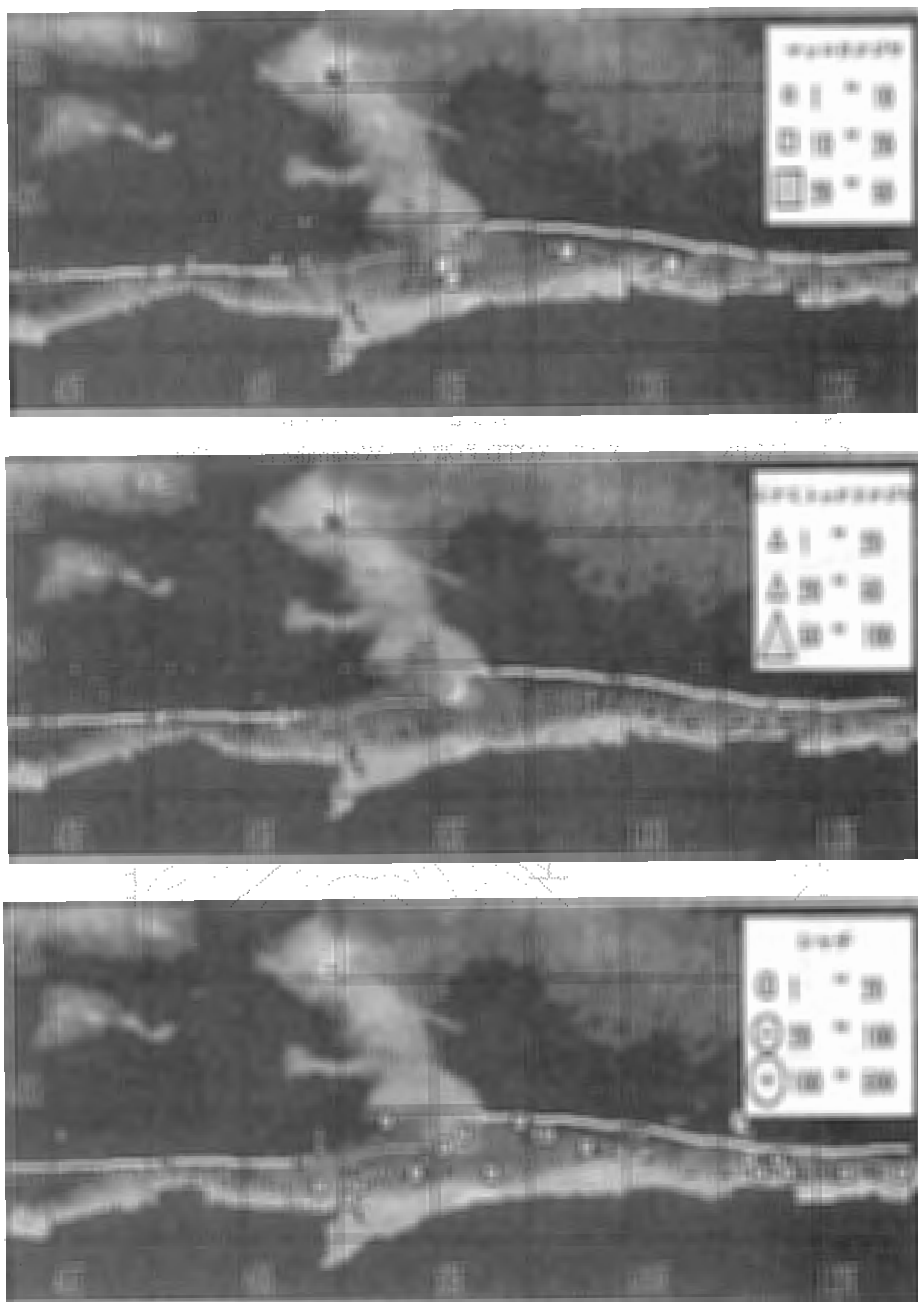


図 3 c. JARPA-1997/98において観測された南極周極流南側境界（実線）と発見されたハクジラ類の緯度経度1度グリッドごとの密度指数（100マイルあたりの発見頭数）。破線は衛星写真と調査船からの観測情報により推定した氷縁ライン。

上図：マッコウクジラ、中図：ミナミトックリクジラ、下図：シャチを示す。

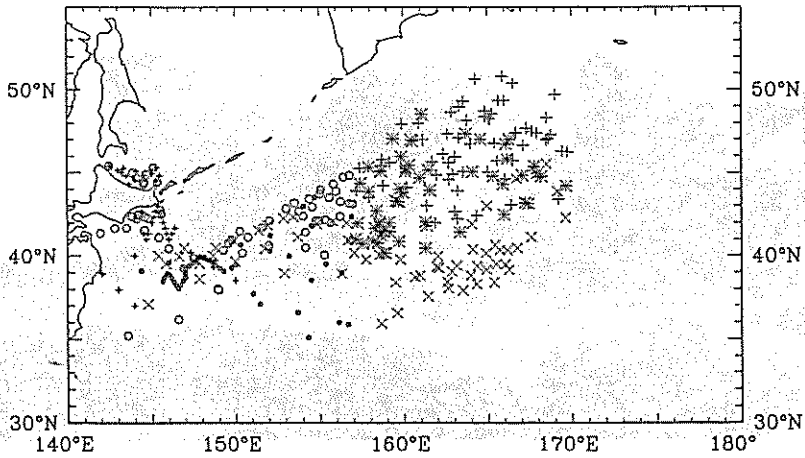


図4. JARPNにおけるXBT/XCTD観測点 (Watanabe *et al.*, 2000より)。

+ : 1994 * : 1995 o : 1996 x : 1997 ▪ : 1998 · : 1999

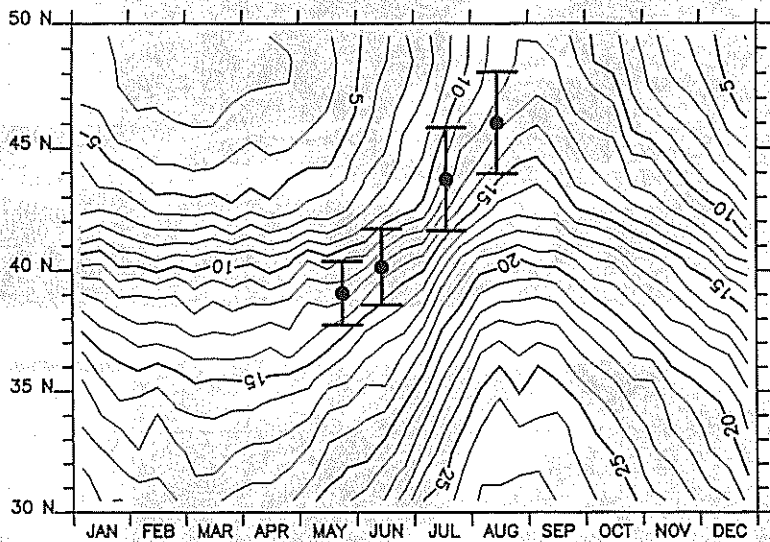


図5. 北西北太平洋における月別の表層水温とミンククジラ分布との関係 (Watanabe *et al.*, 2000より)。

3) ミンククジラの北上回遊と表層水温

表4に1994～1999年度 JARPNにおける月別のミンククジラの主要な発見水域、ミンククジラ発見時の表層水温、胃内容物調査による主要餌生物の関係を示した。沖合い海域である9海区では、ミンククジラ発見緯度は北緯38～40度(5、6月)から北緯42～47度(7、8月)まで北上しているが、発見時の表層水温は5月か

ら8月間で11～13℃とほとんど変化していない。一方で主要餌生物は、5～6月ではカタクチイワシ、7～8月からはサンマに変わっており (Tamura and Fujise, 2000)、春から夏までのミンククジラの北上回遊と餌生物、さらに表層水温分布が密接な関係にあることが明らかになった (Matsuoka *et al.*, 2000)。

表 4. ミンククジラの主要な発見水域、発見時の表層水温、主要餌生物の月別変化 (Matsuoka et al., 2000)

海域	オホーツク海南部			北西北太平洋								
	11			7			8			9		
経度	142 - 145°30'E			日本沿岸 - 150°E			150 - 157°E			157 - 170°E		
水深	100-1500m			200-4000m			4000 m <			4000 m <		
	主要な 発見緯度	発見時 の水温	主要 餌生物	主要な 発見緯度	発見時 の水温	主要 餌生物	主要な 発見緯度	発見時 の水温	主要 餌生物	主要な 発見緯度	発見時 の水温	主要 餌生物
5月	-	-	-	39-40°N*	7-10°C	Ja	39-40°N	11°C	Ja	38-40°N	10-12°C	Ja
6月	-	-	-	41-43°N**	9°C, 15°C	Ja	40-41°N	10-11°C	Ja	38-41°N	11-12°C	Ja
7月	44-45°30'N	11-13°C	Kr	-	-	-	41-43°N	9-10°C	Ps	40-45°N	11-13°C	Ps
8月	44-45°30'N	15-17°C	Kr	41-43°N**	15-17°C	Ps	-	-	-	42-47°N	13-14°C	Ps
9月	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Kr: オキアミ
Ja.: カタクチイワシ
Ps: サンマ
* 7海区東側海域
** 道東海域

4. 今後の課題

4.1 海洋観測継続の必要性

JARPA/JARPNにおける海洋観測は、海洋環境と鯨類の分布、海洋環境と餌生物分布との関係を明らかにする点で非常に有効であり、今後さらなる解析が期待されている。また、毎年一定レベルでの観測を積み重ねることによって、海洋環境の短期、長期にわたる環境変動をモニタリングできるという利点もあろう。特に南極海での海洋環境調査は、海域の特殊性から考えても大変貴重なものといえる。鯨類捕獲調査における優先順位は、目視、生物調査と比較して低くなることは否定できないが、今後とも海洋観測を継続していく必要がある。

4.2 観測体制（観測から基礎解析まで）の確立

冒頭でも述べたが、最近の傾向として鯨類を取り巻く生態系や海洋環境の変化、地球温暖化によると考えられる南極海や北太平洋の海洋構造（氷縁）変化と鯨類の関係、また鯨類の餌生物（オキアミ類、イカ類、魚類）と鯨類の捕食関係、さらには漁業との競合関係などに研究者の関心が高まっている。これらの問題に対応するための当研究所の海洋観測体制の整備はほぼ完了したと思われる。

今後は、1) 調査海域、調査目的に合った観測機器の使い分け（特に船団で行動する際の各

船CTD,EPCSの活用方法）の検討、2) 調査員及び乗組員に対する観測機器操作や管理方法の周知徹底、3) 次回調査へのフィードバック（実験回数、観測点設定方法など）を目的とした各海洋観測データの基礎解析作業の省力化、が当面の課題であろう。

4.3 他の研究機関との共同調査

海洋生態系総合調査の必要性は今後とも高まるものと考えられるが、調査項目が多岐にわたるかつ広大な調査海域をカバーしなければならないことから、一研究機関の調査では調査期間、予算などの面で自ずと限界がある。当研究所が関係する最近の国際研究機関の共同調査例として、1999/2000年度の南極海モニタリング海域（多少のずれはあるが）において、IWCが鯨類の目視、音響、バイオプシー調査などを担当し、南極海洋生物資源保存委員会（CCAMLR）がオキアミ調査を担当した例が挙げられる。さらにIWCは、2000/2001年度の南極海においてGLOBEC南大洋研究計画との共同調査を現在計画中である。JARPA/JARPNでは、管轄する水域及び関係国との調整が必要となるため、上記のような国際研究機関との共同調査にはかなりの労力と時間が必要となる。当面は国内の水産庁研究所をはじめとする研究機関等との共同調査もしくは協力体制を検討する必要がある。

5. 謝辞

本報作成にあたり、資料提供を快諾いただいた遠洋水産研究所低緯度域海洋研究室渡邊朝生氏（現東北水産研究所）をはじめ、日頃からご指導いただいている共同研究者の方々に改めて感謝申し上げます。また過酷な自然環境の中で調査に従事した調査員、乗組員、観測機器導入と保守管理に御尽力いただいている共同船舶株式会社をはじめ関係者各位のご努力に対し深謝する。

6. 引用文献

- Matsuoka, K., Watanabe, T., Ichii, T., Shimada, H. and Nishiwaki, S., 1999. Application of the XCTD oceanographic survey in the Antarctic Areas III E and IV (35°-130° E) during 1997/98 JARPA cruise. Paper SC/51/E5 presented to the IWC Scientific Committee, May, 1999. (unpublished).11pp.
- Matsuoka, K., Hakamada, T., Fujise, Y. and Miyashita, T., 2000. Distribution pattern of minke whales based on sighting data during the JARPN 1994-1999. Document SC/F2K/J16 submitted to the JARPN review meeting, February 2000. (unpublished).17pp.
- Mizuno, K. and Watanabe, T. 1998. Preliminary results of in situ XCTD/CTD comparison test. *Journal of Oceanography* 54, 373-380.
- Naganobu, M., Kano, H., Fujise, Y., K., Nishiwaki, S. and Kato, H., 1995. Relationship between oceanographic conditions and minke whale density in the Antarctic Ocean based on the data from the Japanese Scientific Permit Cruise in 1989/90, 1991/92 and 1993/94. Paper SC/47/SH11 presented to the IWC Scientific Committee 1995 (unpublished). 21pp.
- Tamura, T. and Fujise, Y., 2000. Geographical and seasonal changes of prey species in the western North Pacific minke whale. Document SC/F2K/J22 submitted to the JARPN review meeting, February 2000. (unpublished).26pp.
- Tynan, C. T. 1998. Ecological importance of the Southern Boundary of the Antarctic Circumpolar Current. *Nature* 392: 708-710.
- 若土正暁, 1993. 南極発散線の海洋構造と南大洋におけるその役割, 月刊海洋 25(9): 527-532.
- Watanabe, T., and Mizuno, K., 1994. Decadal changes of the thermal structure in the North Pacific. *Int. WOCE Newslett.* 15:10-13.
- Watanabe, T., Matsuoka, K., Tamura, T. and Fujise, Y. 2000. Oceanographic conditions of the Western Subarctic Gyre region based on oceanographic data during the JARPN 1994-1999. Document SC/F2K/J26 submitted to the JARPN review meeting, February 2000 (unpublished).18pp.

アイヌ民族のクジラ利用文化

岩崎・グッドマン まさみ (北海学園大学)
野本 正博 (アイヌ民族博物館)
藤島 法仁 (鹿児島大学大学院)

1. はじめに

アイヌ民族とクジラとの深い関わりは古く考古学的文献に始まり、北海道紀行文、民話や唄

や踊りの中に見られ、アイヌ民族がクジラ資源を多方面に利用した事実をものがたっている。さらにアイヌの古老を対象とした聞き取り調査では、アイヌの人々が近年に至るまでクジラ資

源を利用してきた事は明らかである。これらの資料を再検証する努力が渡部（1992）や秋道（1994）によりなされているが、本報では過去におけるアイヌ民族とクジラの関わりを明らかにするだけに止まらず、現代社会においてクジラとの関りがどのような意味を持つのかという問題を現代に生きるアイヌの視点からとらえる。

2. 文献が語るアイヌ民族とクジラ

北海道に住む人々が古くからクジラ資源を利用してきたことを示唆する考古学資料は古く縄文時代にさかのぼる事が出来る。函館市桔梗2遺跡からシャチ型の土製品が発見されているが、この土製品は縄文中期に作られたと考えられ、シャチをあがめたアイヌ民族の儀式に通ずる宗教性を感じるものとされている（落合，1992）。また縄文時代の遺跡とされる東釧路遺跡からイルカの頭蓋を放射状に並べた宗教儀式を思わせる遺物や、大量に積み上げられたイルカの頭蓋が発掘されている（西本，1985）。さらに根室市の弁天島貝塚からは、針入れと見られる鳥骨製容器が発掘されている。この容器の表面には船に乗った数名の人がクジラとみられる大型の海獣を捕獲している様子が描かれている（大井，1982）。これらの人々がアイヌ民族の祖先であったかどうか、またこれがクジラなのかという疑問にたいして明確な答えはまだない。しかし様々な考古学資料からクジラやシャチなどの海獣を捕獲して利用する文化は古く縄文時代からあり、オホーツク文化人や近世アイヌ民族も同様にこれらの資源を利用してきたと考えられる。

1600年代にはいり、北海道を訪れた探検家達によって残された記録の中には、当時のアイヌ民族がクジラを利用していた記述がある。17世紀の中期に北海道へ金・銀を求めてやってきたオランダの探検家達の記述によると、「彼ら（アイヌ）の食料と栄養物は魚、鯨の脂肪、魚油、野草、アツケスイには豊富にある赤いバラの実などである（北構，1983）。」また「（アイヌ）男子は魚油、鯨の脂肪、燻製の鯨の舌、各種の

毛皮、および鳥の羽根を日本の住民と交易する（北構，1983）。」と記録されている。さらに「原住者は、他の場所と同様に、多くの鯨をとることを知っていた（北構，1983）。」と記述され、当時のアイヌの人々がクジラを捕獲する技術を持ち、食料や交易品としてクジラを利用していた事を示唆している。同様の記述は他にも残され、津軽藩の記録にはアイヌから和人への交易品として保存用に干したクジラの肉などがアイヌから和人に贈られていた事が記されている（羽原，1939；奥山，1966；阿部，1984）。

さらに板橋（1989）は北海道では古くからクジラ資源が利用されてきた事を示す根拠として、いくつかの記録をあげ、「敦賀郡誌」に記録された「寛文七年雜記」（1667年）には松前から現在の福井県敦賀港に運ばれた品物の中にクジラが含まれていたことや、「津軽一統志」（1669年）、「蝦夷土産」（1790年頃）や「三国通覧図説」にも同様の記述が見られること、さらに「松前誌」（1783年）では、アイヌがクジラの捕獲の際に弓矢を用いたことが指摘されている。

クジラが松前藩の重要な産物として流通するようになると、しだいに藩はアイヌ民族が寄りクジラを利用する事を規制するようになっていった。享保7年（1722年）には掟が布達され、アイヌの人々が寄りクジラを発見した場合には町奉行所に報告する義務が課せられるようになった（雄武町，1962）。このような管理体制はオホーツク海側のアイヌ集落にもおよび、寄りクジラの配分が幕府によって決められるようになっていく。さらにこの地域の場所請け負い制度はアイヌの労働力搾取に大きく偏り、その結果アイヌの人々は漁労や狩猟の自主性を失って行くこととなった（奥山，1966）。

1800年代に北海道を探検した松浦武四郎の「蝦夷日誌」（吉田，1962）にはクジラに関する記述が各所に見られる。その多くが北海道沿岸にクジラが多く回遊している状況の観察や各地のクジラに関わる地名に関する記述である。しかし北海道南部に関しては、毒を用いた鉋や槍を打ち、後に打ち上がったクジラの様子や、それを食べた人の死亡事故に関する記述などがあり、他の地域とは異なった特徴が見られる。さ

らに興味深い文献としては、千葉県勝山浦で捕鯨を始めた醍醐親兵衛の7代目定繼(さだつぐ)が北海道での捕鯨開業をめざして、安政3年(1856年)に北海道の南岸から東岸にかけて旅をした。その時に見たアイヌの捕鯨の様子を「幼稚な蝦夷人の突棒捕鯨」と描写している事から、この当時にこれらの地域のアイヌは銚や槍を用いてクジラを捕獲していた事が解かる(福山, 1943)。同じ安政年間の紋別場所の記録(小川, 1998)には、寄りクジラを発見したことが報告され、それを役人が見分に出かけた後にクジラの解体がおこなわれるという記述がある。この一年間に紋別地域で2回の寄りクジラが記録されていることから、その当てもオホーツク海のクジラ資源が豊富であったことがうかがわれる。寄りクジラの配分に関しては、その3分の1は上納され、発見者であるアイヌには3分の1が渡されると記録されている(小川, 1999)。新紋別市史(紋別市, 1979)にも同様の記述がみられ、同市史は寛政年間(1789年~1801年)の記録である「蝦夷嶋奇観」を引用して、当時のアイヌが流氷で傷を負ったクジラなどを舟を出して引き寄せてきて利用していた様子を紹介している。またクジラの一部は「御用鯨」として塩切りクジラ肉を箱詰めにして送った事を記述している。同じ頃の記録としてアイヌが岸に打ち上げられたクジラを食料として利用している記述(阿部, 1984)やクジラが岸に上がるとその地域の長が配分を決めた(奥山, 1966)などの記述があることから、17世紀・18世紀頃にはアイヌ民族のクジラ利用文化が確立していたと考えられる。

アイヌ民族による捕鯨と函館との関わりは後にさらに深まり、1855年から後幕領期に江戸幕府は改めて捕鯨業に強い関心を示し、アイヌのクジラ漁に注目した。当時「鯨漁の任」が松浦武四郎とともにクヌイに赴き、その地の古老にアイヌのクジラ漁法について聞いたことが「戊午東西蝦夷山川取調日誌」(1858年)に記録されている(田端, 1990)。この記によると、古老は50~60年前には毒を仕掛けた矢じりを付けた矢を大勢のアイヌがクジラに向かって射り、後にそのクジラが浜に流れ着くの待つという漁を行っていた様子を語った。このような

漁法は明らかに本州の鯨組の漁法とは異なるものである。

3. クジラに関わる地名

・民話・唄

アイヌの先祖は北海道の各地にアイヌとクジラの深い関係を記す地名を残した(吉田, 1962; 山田, 1984)。フンベやその変形であるウンペという言葉の入った地名が多く、フンベ山、フンベサバ、フンベの滝、などが知られている。フンベ・オマ・ナイという地名は紋別などのオホーツク海側のアイヌ集落など北海道各地に見られる(伊藤, 1978)。この地名は海岸にクジラが上がったところの川という意味だろうといわれている。白老町にはオソロコツ(尻の窪み)とイマニツ(それを焼く串)という地名がある。その謂れは、昔アイヌの文化神が、海岸でクジラの肉をよもぎの串に刺して焼いていたら、パチンと音がしてその串が折れた。文化神が驚いて尻餅をついた跡がオソロコツで、海中の岩が残った串だという(山田, 1984)これらの地名は現在その地域で生活する人々に、アイヌ民族とクジラの関わりを日々呼び起こしてくれる。

アイヌ民族とクジラの関わりは古くから伝承されてきた民話や詩歌、また踊りなどに明らかである。その中でアイヌは富をもたらす存在としてクジラに感謝し、さらにアイヌとクジラの良い関係が継続する事を祈っている(知里, 1986)。

大きな鯨が寄り上がった
 まあうれしい
 神様が神駕にのってお出でになった
 わしは大層大きな鯨だから
 庭の上から
 冷たい空気や風に
 吹き上げられる

アイヌの古老が歌う歌にフムベカムイ(フンケ(クジラ神の子守歌)があり、その内容は「鯨の神様がメノコ(女)を嫁に欲しくて人間

に姿を変えて、婿さんになったらそのあとに鯨を陸に上げてやる約束をしたのでたいへん幸福になった（札幌テレビ放送株式会社、1983）」というものであり、この歌にもクジラがアイヌに恵みをもたらす喜びが歌われている。ユーカラ（アイヌの伝承による叙事詩）の中にもクジラは登場しており、アイヌ民族とクジラの結びつきの深さがうかがえる。「怪鳥フリと白ギツネ」の中には、フリという巨大な鳥が丸まのクジラ一頭を抱えて飛んできて、一口食べさせて欲しいと言う白ギツネの神の願いを無視して、エゾマツの枝の上にクジラを置いて食べようとする。腹をたてた白ギツネの神がフリに呪術をかけて、クジラを横取りするという話が出てくる（萱野、1998a）。また「襟裳岬のシャチの神」というカムイユカラはシャチの妻になった娘が、その事を悲しんで泣く母親に襟裳岬にクジラを寄越してなだめ、それ以来襟裳岬にクジラが寄り上がってクジラの脂身を食えることが出来たという話しである（萱野、1998b）。

祭りなどで踊る「寄りクジラの踊り」は有名である。アイヌはこの踊りを踊る事によって、クジラが浜に上がるという望ましい結果をあらかじめ先回りして演じ、それによりその通りの現実が起こると信じた。この踊りの形態は地域により多少の差はあるが、踊りの持つ意味は共通して寄りクジラを得る喜びを表現している（北海道教育委員会、1968）。クジラになる一人が着物をすっぽり被り、中央に横たわる。そこへ盲人の老婆をまねた人が杖をつきながら歩いてくると、何かにつまずく。杖や手で確かめると、クジラである事に気がつく。老婆は大声でクジラが寄り上がった事を知らせる。知らせを聞いた村人が背負い袋を下げて寄りクジラの歌を歌いながら集まってくる。クジラを囲んで肉を背負い袋に入れておくと、カラスがあっちこちから鳴きながら集まってきて、クジラをついばもうとするが、村人に追い払われる。肉を分け終わった村人が、唄を唄いながら帰って行く。カラスは残りの肉をついばみ、飛び去っていく。後にはぬけがらの着物が残る。これらの民話や踊りは現在アイヌ芸能として、若い世代のアイヌに継承されている。

4. アイヌが語るアイヌとクジラ

聞き取り調査の中で現代のアイヌ達がアイヌ民族とクジラの深い関わりについて語っている。アイヌはクジラがもたらす豊かな資源を無駄にしなかったと語る釧路の山本多助エカシはクジラの保存方法について次のように語っている（新谷、1979）。

クジラを捕るとな。波打ち際に大きな穴を掘るのだ。そこへクジラを埋めるんだが、それがちゃんと海水がしみこんでくる位の深さに掘る。そうすれば、海水でクジラの肉も腐ることはない。アイヌにはアイヌのやり方がちゃんとあるんだ。

鹿や熊などの陸の哺乳動物と同様、クジラをアイヌは好んで食べた（バチエラー、1925；金田一、1961）。クジラの調理方法としては鯨油をとり、それをオハウ（汁）にかけて食べたり、肉を大きく切って海水で煮て塩で味付けする等があるが（名取、1940）、最近の聞き取り調査（北海道教育委員会、1992）で、釧路の古老が以下のように述べている。

クジラが上がる事がある。春先、海の氷にはさまって岸に上がった。その時はフンベの神にカムイノミをした。解体を手伝いに行くのと分けてもらえた。人背負い分ももらえた。塩ゆでにしておやつ代わりにしたり、油も採った。油はビンに入れた。「クジラを送り」というのは聞いたことがないが、トウキ（杯）をあげてノミ（祈り）をして頭を食べた。



図1. フンベリムセ（鯨の踊り）。
—寄り鯨を願い踊られてきた芸能。
「アイヌ民族博物館」提供。

また他の聞き取りで、ある古老は「その油はイモを煮たのにかけてり、野菜を炒めるのに、毎日熱して溶かして使ったが、2年ももった。」(北海道教育委員会, 1995)とクジラの油を有効に使った事を述べている。紋別に住む古老は子供の頃のクジラの思い出を以下のように語る(岩崎, 1997)。

子供の頃、クジラが岸に上がると肉と脂をもらって、母親が少し肉のついた脂の部分に塩をつけて屋根の上に干し、ベーコンのようなものを作った。それを畑をしている人のところへ持って行って野菜や米と交換した。

食料以外のクジラの利用法も多様であった。鯨油は食料として用いる他に燈火燃料として用いたり、ひげは船を作る際に板を綴じるために用いたり、キテの刃を支える部分にはクジラの骨が用いられ、それぞれの部分を有効に利用した(名取, 1940; 萱野, 1978)。子供の頃(約50年ほど前まで)に鯨油を燈火燃料とした事を記憶しているアイヌの古老もいる(岩崎, 1998)。

クジラの脂を屋根に置いておくと、油が滴ってくる。それを入れ物にとり、布で芯を作り、欠けたサンベ皿に鯨油と芯を入れてランプにしていた。食料としても大事だったけど、鯨油や魚油は生活の核だったね。

アイヌの捕鯨に関する最も詳細な記録は1938年に名取が残した聞き取り調査である。噴火湾で生涯2度、クジラを捕った古老がその体験を語る。



図2. イタオマチブ(板綴船)。
— 鯨漁や交易に使用された。
「アイヌ民族博物館」提供。

ある日、長万部で午前9時頃、魚をとっているさいにコイワシクジラを発見。最初にキテ(回転式離頭モリ)を打ち込む。それから1時間後、クジラが浮き上がったときに二番モリを打ち込む。クジラがまた水中に沈む。1時間くらいしてからまた浮上したところを三番モリをいる。そのままクジラに引きずられて悪戦苦闘する。日が暮れてきたので、浜の人々に応援を頼み、さらに十数隻の船が参加してクジラにモリを打ち込む。……中略……クジラが浜に上がると、アイヌの古老はイナウを立てて、クジラのいる横にゴザを敷いて神に祈りを捧げた。

名取(1940)はこの当時捕鯨に使われたキテと呼ばれる鉋について、鉋がクジラの体に刺さると鉋頭がシャフトから離れ、回転してクジラの体に残る仕組みであり、巨大なクジラを捕獲するためには鉋頭にトリカブトの毒を塗り、その効果を高めた事を記録している。またアイヌが漁に使う船は、全長約3メートル、丸太をくりぬいて底部に板をつなぎあわせ舷側とした小船で、2-3人が乗り込んでいた。男達が漁に出ている間、女や子供は家で静かにし、家から物を出してはいけないうし、人に物を与えてもいけなかった。

更科源蔵(1955)も自筆の調査ノートに長万部地方の古老に聞いた話として、名取と同様のキテを用いたアイヌ捕鯨の様子を記録している。更科(1955)はさらに八雲地方のアイヌ古老に聞き取りをし、アイヌの人々がトリカブトをカラスやキツネの胆汁と混ぜて竹槍につめてクジラに投げつけるという方法を用いてクジラ

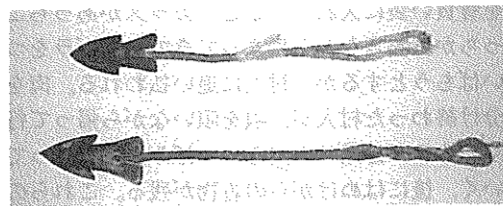


図3. キテ(鉋)。
— 海獣漁や大型魚類の捕獲に使用された。
「アイヌ民族博物館」提供。

を捕ったことを記録している。このようなクジラ漁は合理的であり、毒が効いてクジラが漂着するとそれを発見した人が竹槍に印されている家紋から誰が射たものであるかを判断して、その人のところに連絡したと記録されている。毒をつめた槍を用いてクジラを捕った記述は紋別地方にも見られる（紋別市，1979）。

最近の聞き取り調査ではほとんどのアイヌの古老が寄りクジラの体験を語っている。1949年に白老地方の浜に上がったクジラについて下記の通り、古老が語っている（藤村，1976）。

クジラは1949年6月8日にレブンカムイ（シャチ）2頭に追われて、逃げ場を失って白老の浜へ乗り上げた。浜辺でばたついているうちに横波をうけてどうする事もできないでいた。沖ではレブンカムイが獲物を横取りされたと思っているのか知らないけどキーキーと泣いて海上をボンボン跳びはねていた。クジラは長さ3間もあったが、これでも赤子だという。

この時、クジラを解体した後、年寄り達により簡単な送り儀礼が執り行われた。其のときの祈りの言葉は下記のものであった。私達のコタンにわざわざおこしになって大層ごくろうであった。親元から離れてつらかりうが、これもみなウタリ（親族）のために、肉や皮・油などの土産を持参していただき、全くありがたい。

1986年に白老で行われた聞き取り調査で明治31年から大正12年の間に生まれた古老達が白老近郊でのクジラやシャチとの関わりを下記の通り語る（アイヌ民族博物館，1985）。

クジラは漁で捕るというよりは、比較的偶然に捕れたりする事がしばしばあった。シャチに追われてあがったらしい。2トンくらいののが戦後に捕れたことがあった。年寄りが沖の神に礼拝し、そのクジラは解体された。その後、浜をきれいにするといった意味のカムイノミを行った。クジラはまず捕るという気で捕るといった事はあまりない。キテはカジキマグロのを使っていた。

この聞き取りで明らかになったことは、この当時すでにアイヌは寄りクジラを利用する権利を奪われており、クジラが浜に上がると、その地域の漁業権を持っている漁業者が優先的にクジラを得る権利を主張し、伝統的なアイヌの権利が認められていなかった。オホーツク海側の紋別にも最後と思われる寄りクジラを記憶している古老がいる。それは約60年程前の出来事だった。

私が4-5歳の頃だったか、紋別の浜に流水に挟まったクジラが寄ってきて、部落の人達20人くらいでロープにつながって、手には先にカギのついた竿を持って、それで（氷を）ついて安全を確かめて渡って、クジラを引き上げてきた事を覚えている。元紋別の流水館のあたりです……中略……その後シャチが上がったことを記憶している。それも食べたね。（岩崎，2000）

クジラの中でもシャチはレブンカムイ（沖の神）という特別な名称で呼ばれ、クジラを岸に追って来てアイヌに恵みを与える事から、陸の熊と比較されるほど大切な神様として扱われた（金田一，1961；マライニ，1994）。アシベ文と呼ばれるシャチのセビレ文は海岸地域のアイヌだけではなく、広い地域のアイヌの彫刻に見られる（アイヌ文化保存対策協議会，1969）さらにアイヌの男子の家系を標示する家紋としてシャチの背鰭の部分が用いられている（名取，1940）。白老地域の古老がシャチについて語る（アイヌ民族博物館，1985）。

シャチはカムイと呼ばれていた。シリカブ（カジキマグロ）と同じ位の場所において、誰にも手がつけられないほど獰猛であったところからカムイと呼ばれていた。獰猛なので恐ろしい目にあつたことがある。群れをなしてクジラを襲うことがあり恐ろしいものだ。沖漁にでているときレブンカムイが舟に近寄ってくる時がある。こういうときはすぐ弁当の一部を舟からレブンカムイに向かって海中に流すものだという。こうすると神はそれを押しいただいて食べ、

その人へ漁をさずけ、航海の安全を確保してくれるものであると。

5. 現在に生きるクジラ文化

アイヌとクジラの関わりはもはや過去のものとなってしまったのだろうか。最近みられるアイヌ伝統文化の復活の動きの中で、より多くのアイヌが「クジラ踊り」を踊り、ウポポを歌い、民話の中でアイヌとクジラの関わりを語るようになった。当然これらの伝承芸能の持つ意味は100年前とは異なり、現在のアイヌ民族が自らの伝統文化を維持・再生しようとする努力である。寄りクジラを願って踊った先祖達の思いとは異なり、今「クジラ踊り」を踊るアイヌの人々はアイヌ民族としての自己のアイデンティティーを探っているのではないだろうか。

私達の先祖は「捕鯨」とか「寄りクジラ」というかたちでクジラを利用していた。現代に生きるアイヌとして、その事実を誇るべきアイヌ民族の伝統文化として語っていききたい。その誇りがアイヌ民族のアイデンティティーを現時代に再生させていく拠り所となる（岩崎，1997）。

沖の神としてアイヌに崇められたシャチのひれを型取った家紋は、現在儀礼を行う人や彫刻をする少数のアイヌに受け継がれている。シャチの紋はこれらの人々に自己の家系を証すものであると同時に、アイヌ民族の伝統を受け継ぐ者としての誇りという力強い意味を持って用いられているのである。シャチの家紋を継承する青年が語る。

家にあつた儀礼の杯に刻まれていたレブンカムイの印を自分のマークとして活用しています。刻みを象徴するシャチに対しての思いは強く、このマークを使う事に誇りと強い責任を感じています（岩崎，1997）。

アイヌとクジラの伝統的な関わりを復活させる努力は「カムイニリ」の復元にも現れている（青木，1990）。昔、余市浜ではシャチに追われ

た鯨類が多く岸に上がった事から、木製のシャチをイナウで飾り、その下にシャチがもたらすクジラ、イルカ、海豹などの海の幸を木で型取り、横一列に下げる「カムイニリ」を作り、家中のシントコなどの宝物の置かれている上につりさげ、それに向かって祈りを上げた。この「カムイニリ」が1990年に復元され、余市でもレブンカムイの伝承が守られてきた事をしめた。

最近、数十年の空白の期間を経てカナダやアメリカ合衆国の先住民族によって捕鯨を再開す

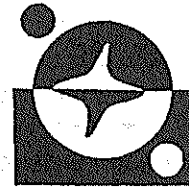


図4. 現在使われている「シャチの家紋」。

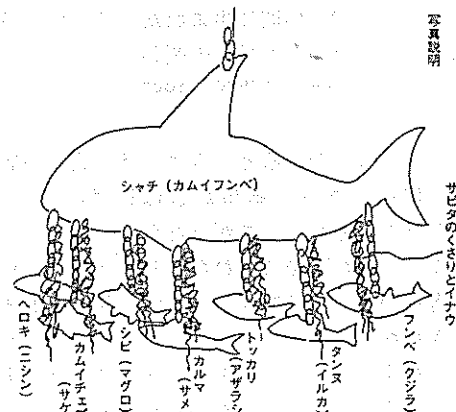
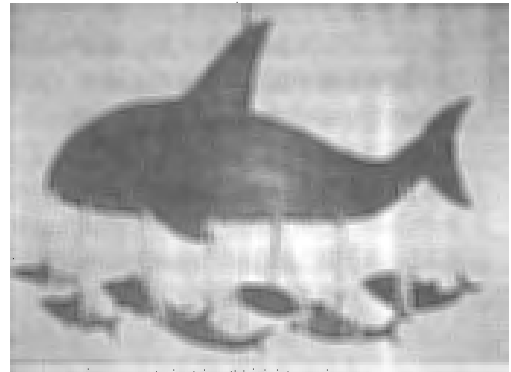


図5. カムイニリ。（青木，1990）より。

る努力がなされている。これらの民族は先祖が行った捕鯨を継承する事は、現代に生きる民族にとり重要であり、そこに民族アイデンティティの拠り所があると主張する。クジラ資源を利用する伝統をもった先住民族の間には、時間が消す事の出来ない深いつながりが継承されている事を、実証しているのではないだろうか。海を隔てた日本では、1997年に施行された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」の精神を反映して、現代に生きるアイヌが伝統文化を礎として自らの民族アイデンティティを確立する歩みが始まっている。アイヌ民族のサケ儀礼が復活し、サケ漁の始まる時期には北海道各地でアイヌによる儀礼が行われている。数年前には伝統的シカ猟が復活した。このようなアイヌ民族伝統文化の復活という大きな流れのなかで、過去のクジラとアイヌ民族とのつながりを再確認し、それを新しい世代に伝えていこうとする復活の新たな鼓動が始まっている。

6. 参考文献

- 阿部正己(編). 1984. アイヌ説(一)(二)アイヌ資料集第5巻第2期出版. 北海道出版企画センター, 札幌.
- アイヌ文化保存対策協議会(編). 1969. アイヌ民族誌(上・下). 第一法規出版株式会社. アイヌ民族博物館. 1985. 聞き取り資料.
- 秋道智弥. 1994. クジラとヒトの民族誌. 東京大学出版会, 東京.
- 青木延広. 1990. ヨイチアイヌの民俗「カムイニリ」について. 北海道の文化 61. 北海道文化財保護協会.
- バチェラー ジョン. 1925. アイヌ人とその説話. 富貴堂書房, 札幌.
- 知里真志保. 1986. 和人は舟を食う. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 藤村久和. 1976. 北海道史研究. 北海道史研究会, 札幌.
- 福山順一. 1943. 捕鯨界の先覚者醍醐新兵衛. 日本出版社, 大阪.
- 羽原又吉. 1939. アイヌ社会経済史. 白揚社, 東京.
- 北海道教育委員会. 1968. アイヌ民俗文化財調査報告書.
- 北海道教育委員会. 1992. アイヌ民俗文化財調査報告書.
- 北海道教育委員会. 1995. アイヌ民俗文化財調査報告書.
- 板橋守邦. 1989. 北の捕鯨記. 北海道新聞社.
- 伊藤せいち. 1978. 紋別と興部のアイヌ地名. 紋別郷土史研究会.
- 岩崎・グッドマン・まさみ. 1997. フィールドノート.
- 岩崎・グッドマン・まさみ. 1998. フィールドノート.
- 岩崎・グッドマン・まさみ. 2000. フィールドノート.
- 萱野茂. 1978. アイヌの民具. すずさわ書房, 東京.
- 萱野茂. 1998a. 萱野茂のアイヌ神話集成 1. ビクター, 東京.
- 萱野茂. 1998b. 萱野茂のアイヌ神話集成 3. ビクター, 東京.
- 金田一京助. 1961. アイヌ文化志. 金田一京助選集II. 三省堂, 東京.
- 北構保男. 1983. 1643年アイヌ社会探訪記. 雄山閣出版, 東京.
- マライニ, フォスコ (Maraini Fosco). 1994. アイヌのイクパスイ. アイヌ民族博物館, 白老.
- 紋別市. 1979. 新紋別市史.
- 名取武光. 1940. 北海道噴火湾アイヌの捕鯨. 北方文化研究 3 : 137-161.
- 西本豊弘, 他. 1985. 動物学. 考古学11 : 91-95.
- 落合治彦. 1992. 函館周辺の捕鯨事情. 函館昔話 4 : 50-60. 函館パルス企画.
- 小川昭一郎. 1998. モンヘツ場所語同心の公務日記. 道都大学紀要 教養部 第17号 : 1-43.
- 小川昭一郎. 1999. モンヘツ場所語件書付. 道都大学紀要 社会福祉部 第23号 : 1-63.
- 大井晴男. 1982. シンボジウム: オホーツク文化の諸問題. 学生社, 東京.
- 奥山亮. 1966. アイヌ喪亡史. みやま書房, 札幌.
- 雄武町. 1962. 雄武町の歴史.

札幌テレビ放送株式会社(編)、1983、エカンとフチ、札幌。
 更科源蔵、1955。コタン探訪帳(調査ノート)、新谷行、1979。コタンに生きる人びと、三一書房、東京。
 田端宏、1990。開港と函館の産業・経済。函館市史。通説編第二巻、函館市。
 渡部裕、1992。アイヌの海獣狩猟。北海道立北方民族博物館研究紀要第1号:53-76。

山田秀三、1984。北海道の地名。北海道新聞社、札幌。
 吉田常吉(編)、1962。松浦武二郎 蝦夷日誌(上・下)。時事通信社、東京。

(付記)本稿は平成11年度北海学園学術研究助成一般研究(課題名「北海道における先住民族のクジラ利用文化」)による成果をまとめたものである。

日本鯨類研究所関連トピックス(2000年3月~2000年5月)

第32回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標記会合が、3月8日午後当研究所会議室において33名の参加の下で開催された。今回は、北海道区水産研究所の柏井誠氏が「PICESと水産資源管理の科学」、水産庁研究指導課の和田時夫氏が「生態系ベースの資源管理」と題する話題を提供し、それらの話題について活発な質疑応答が行われた。

公益法人の業務及び財務状況の検査の実施

3月27日水産庁遠洋課鍋島係長及び高田係長により、当研究所の事業の運営等についての検査が実施された。

IWC/SOWER調査船の帰港

昨年11月26日広島県瀬戸田港を出港し、IWC/SOWER調査に従事していた昭南丸及び第2昭南丸が3月27日横須賀市田浦港に帰港した。

両船は南アメリカ・ホーン岬南方海域で南大洋鯨類・生態系調査及びその往復航海における南半球産鯨類の分布、目視調査による情報の収集等を行った。両船にはIWC国際調査員として7カ国延べ8名が乗船した。

職員の採用及び退職

4月1日付で、研究部生態系研究室に安永玄太、調査部観測調査室に木和田広司を採用し、鮎川

実験場に囑託として榊静男を採用した。また、3月31日付で、研究部資源分類研究室 阿部秀明が退職した。

第13次南極海鯨類捕獲調査船団の帰港

昨年11月9日に下関港を出港した調査船団は5ヶ月余りの調査航海を終えて、4月4日に目視・採集船勇新丸が因島の田熊港に、第1京丸と第25利丸が下関港に、4月6日に調査母船日新丸と目視専門船第2共新丸が釧路港に、それぞれ帰港した。

今回の調査では過激な環境団体であるグリーンピースから昨年12月20日から本年1月16日にかけてゴムボートや大型船(アークティック・サンライズ号:949トン)を使った妨害行為を繰り返し受けたにもかかわらず、調査は順調に進み、ミンククジラ標本439頭を採取して終了した。

今回の調査ではミンククジラ1,773群7,559頭という調査史上最大の発見があり、ザトウクジラについても年々発見が増加傾向にあるが、今回も747群1,453頭の発見があったことが特徴付けられる。

第11回ワシントン条約締約国会議(CITES)の開催

4月10日から20日までケニアのナイロビで開催され、当研究所から大隅理事長をはじめ役員5名が参加した。

今回の会議においても日本とノルウェーが提

案したミンクジラの国際取引規制緩和(ダウンリスティング)は採択されなかったが、50カ国近い国の賛成が得られたことは、参加国の半数近い国が鯨類資源の持続的利用について理解を示していると言える。

週刊誌への広告掲載

第11回ワシントン条約締約国会議(CITES)の開催に呼応して、週刊朝日、週刊文春、週刊新潮の3誌に当研究所の捕鯨問題に関する主張について意見広告を掲載した。

第33回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標記会合が、4月24日午後日本水産資源保護協会研修室において23名の参加の下で開催された。今回は、水産庁遠洋水産研究所の永延幹男氏が「1999/2000年CCAMLR国際共同による開洋丸南極オキアミ生態系一斉調査の概要と展望」、当研究所の田村力が「南極海のオキアミを巡る争いーヒゲクジラ類を中心としてー」と題する話題を提供し、それらの話題について質疑応答が行われた。

捕獲調査船の一般公開

鯨類捕獲調査と捕鯨を巡る諸問題について国民の理解を得る目的をもって、全国各地で毎年1回開催してきた捕獲調査船の一般公開が、釧路市副港で4月29、30日の2日間開催された。公開されたのは調査母船日新丸と目視・採集船勇新丸であったが、まだ厳しい寒さが残る中での

開催にもかかわらず、13,700人の来場者で賑わった。また、一般公開を記念して、水産庁参事官小松正之氏が「鯨と国際情勢について」講演を行った。

第13次南極海鯨類捕獲調査副産物販売勉強会の開催

5月17日捕獲調査副産物1,843トン(ミンクジラ439頭分)の販売処理について水産庁長官に対する承認申請に先立ち、流通関係業者、地方公共団体等の関係者の参加を得て、販売勉強会を開催した。

販売方法、販売価格等について意見交換の後、日本捕鯨協会から「鯨肉の在庫量調査結果概要」の報告があり、当研究所からは「鯨類食品における水銀汚染について」の報告を行った。

当研究所理事会の開催

5月18日当研究所会議室において理事会を開催し、森本稔氏の当研究所顧問就任が承認された。

CITES報告会及び第52回IWC年次会議事前説明会の開催

ケニアのナイロビで開催されたワシントン条約締約国会議の報告会とオーストラリアのアデレードで開催される第52回IWC年次会議の事前説明会が5月22日から6月2日にかけて全国10ヶ所で開催され、当研究所から大隅理事長外役員が参加した。

日本鯨類研究所関連出版物等(2000年3月~2000年5月)

[印刷物]

当研究所：鯨研通信 405. 28pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.

当研究所：クジラ資源の効果的な調査は如何にして実現できるか? (改訂版). 4pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.

当研究所：Management of Whale Meat Distribution in the Japanese Market (改訂版). 4pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.

当研究所：日本が実施しているミンクジラの捕獲調査 (改訂版). 4pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.

当研究所：大切なことを忘れていませんか? 末永く海洋生物資源を利用していくために. 4pp. 日本

- 鯨類研究所／海の幸に感謝する会, 2000/3.
- 当研究所: Didn't we forget something? How to use marine living resources wisely. 4pp. The Institute of Cetacean Research/The Riches of the Sea, 2000/3.
- 当研究所: CITES COP 11 鯨のダウンリスティング提案。4pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: CITES COP 11 JAPAN'S WHALE DOWNLISTING PROPOSALS. 4pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: CITES COP 11 PROPOSITIONS JAPONAISES DE DÉCLASSEMENTS DES ESPÈCES DE BALEINE. 4pp. Institut de Resherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: CITES COP 11 PROPUESTAS DE JAPÓN SOBRE TRANSFERENCIA DE BALLENAS. 4pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: CITESの決定はIWCに関連させるべきではありません。6pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: CITES DECISIONS SHOULD NOT BE LINKED TO THE IWC. 6pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: LAS DECISIONES DE CITES NO DEBERÍAN VINCULARSE A LA CBI. 6pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: LES DÉCISIONS DE LA CITES NE DOIVENT PAS ÊTRE LIÉES À LA CBI. 6pp. Institut de Recherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: 古い商業捕鯨から新たな持続捕鯨へ。4pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: FROM OLD COMMERCIAL WHALING TO NEW SUSTAINABLE WHALING. 4pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: DE L'ANCIENNE CHASSE BALEINÈRE COMMERCIALE À LA NOUVELLE CHASSE DURABLE. 4pp. Institut de Recherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: DE LA ANTICUADA CAZA COMERCIAL A LA NUEVA BALLENERIA SUSTENTABLE. 4pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: 鯨の資源量は豊富です。真実はここにあります。6pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: WHALES ARE ABUNDANT Here are the facts! 6pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: LES BALEINES SONT ABONDANTES Voici les faits! 6pp. Institut de Recherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: HAY BALLENAS EN ABUNDANCIA ¡Esta es la realidad! 6pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: 何か忘れていませんか? 鯨類と人間の食糧。4pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: DIDN' T WE FORGET SOMETHING? CETACEANS AND FOOD FOR HUMANKIND. 4pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: N'AVONS-NOUS PAS OUBLIÉ QUELQUE CHOSE? LES CÉTACÉS ET LES NOURRITURES POUR L'HUMANITÉ. 4pp. Institut de Recherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: ¿NO OLVIDAMOS ALGO? LOS CETÁCEOS Y EL ALIMENTO PARA LA HUMANIDAD. 4pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: カンガルーとクジラ。2pp. 日本鯨類研究所, 2000/3.
- 当研究所: KANGAROOS AND WHALES. 2pp. The Institute of Cetacean Research, 2000/3.
- 当研究所: Kangourous et Baleines. 2pp. Institut de Recherche des Cétacés, 2000/3.
- 当研究所: CANGUROS Y BALLENAS. 2pp. Instituto de Investigación de Cetáceos, 2000/3.
- 当研究所: 水産資源管理談話会報 22. 31pp. 日本鯨類研究所資源管理研究センター, 2000/4.
- 当研究所: (雑誌広告)76万頭。ミンククジラは豊富です。週刊新潮 2000/4/20.

- 当研究所：(雑誌広告)76万頭。ミンククジラは豊富です。週刊文春 2000/4/20。
当研究所：(雑誌広告)76万頭。ミンククジラは豊富です。週刊朝日 2000/4/28。
当研究所：(新聞広告)76万頭。ミンククジラは豊富です。みなと新聞 2000/5/15。
藤瀬良弘：南極海鯨類捕獲調査(JARPA)と北西太平洋鯨類捕獲調査(JARPN)。日本水産学会誌 66(2): 329, 2000/3/15。
Goodman, D. : If only Greenpeace told the truth about whaling. The Japan Times, 2000/3/16。
石川 創・西脇茂利：日本における海の哺乳類の現状と人間の関係。野生動物医学会誌 5(1):19-25, 2000。
久保麻子・岡村博美・松田 治・西脇茂利：飼育下におけるスナメリの遊泳力と呼吸数(スナメリは運動不足か)。日本海セトロジー研究会第11回大会発表要旨：25, 2000/5/23。
村上光由：生き物を利用するということ。全水卸 259:22-27, 2000/4/28。
村瀬弘人：計量魚探を用いた餌生物現存量調査の鯨類調査への導入について。鯨研通信 405:9-19, 2000/3。
西脇茂利：1998/99年度南極海鯨類捕獲調査(JARPA)概要。鯨研通信 405:1-9, 2000/3。
荻野みちる・石川 創：大型鯨類のライブストランディング対応について。日本海セトロジー研究会第11回大会発表要旨：16, 2000/5/23。
大隅清治：鯨食文化とその尊重。海 3:2, 2000/3。
大隅清治(著)張麗瓊(訳)：鯨豚博物学。270pp. 大樹文化(台湾), 2000/3/20。
大隅清治：これからの捕鯨。漁船 346:118-125, 2000/4/15。
大隅清治：鯨類の生態に関するご進講の榮に浴して。御即位十年記念 御即位十年をことほぎて：69-70 天皇陛下御即位十年奉祝委員会, 2000/4/15。
大隅清治：インタビュー 鯨は人類共有の財産。みなと新聞, 2000/5/15。
大隅清治：鯨の利用に関する2つの期待。21世紀の海洋開発と海産研30年の歩み：48-49 海洋産業研究会, 2000/5/19。
大隅清治：IWC総会に当たって 難関を越えて展望開く。水産タイムス, 2000/5/29。
大隅清治：捕鯨問題の実態。翼 62:123-128, 2000/5/31。
田中昌一：資源管理の理論と実際。水産資源管理談話会報 22:20-31, 2000/4。

[学会発表]

- 坂東武治・三谷曜子・高井則之・坂本 亘：炭素・窒素安定同位体比による北西太平洋ミンククジラの摂餌環境の解明－Ⅱ 同位対比の海域間差。平成12年度日本水産学会春季大会, 2000/4/2。
藤瀬良弘・中田晴彦・銭谷亮子・新美聡子・後藤睦夫・田辺信介：重金属及び有機塩素化合物を指標とした北西太平洋ミンククジラの系群判別の試み。平成12年度日本水産学会春季大会, 2000/4/2。
後藤睦夫・阿部秀明・Pastene, L. A. : mtDNAとマイクロサテライトの多型分析に基づく北西太平洋ミンククジラの系群構造。平成12年度日本水産学会春季大会, 2000/4/2。
久保麻子・岡村博美・松田 治・西脇茂利：飼育下におけるスナメリの遊泳力と呼吸数(スナメリは運動不足か)。日本海セトロジー研究会第11回大会, 2000/5/28。
三谷曜子・坂東武治・高井則之・坂本 亘：炭素・窒素安定同位体比による北西太平洋ミンククジラの摂餌環境の解明－Ⅰ ヒゲ板に記録された摂餌履歴の解明。平成12年度日本水産学会春季大会, 2000/4/2。
西田 伸・小池裕子・後藤睦夫・Pastene, L. A. : Y染色体解析の鯨類への応用。日本生態学会, 2000/3/24。

- 西田 伸・小池裕子・後藤睦夫・Pastene, L. A.: Y染色体で多型解析は可能か-鯨類での試み。三学会九州支部, 2000/5/20.
- 荻野みちる・石川 創: 大型鯨類のライブストランディング対応について。日本海セトロジー研究会第11回大会, 2000/5/28.
- Pastene, L. A.: Management and Conservation of Large Whales in the Context of the International Whaling Commission (IWC). 25th Meeting of the Mexican Society for Studies of Marine Mammals. La Paz, Mexico, 2000/5/7-11.
- 田村 力・藤瀬良弘: 1994-1999年における北西太平洋ミンククジラの食性とその地理的・季節的変化。平成12年度日本水産学会春季大会, 2000/4/2.

[放送・講演]

- 藤瀬良弘: 捕鯨の将来、そしてクジラは今どうしているのか。神戸女学院大学, 2000/5/17.
- 松岡耕二: マッコウクジラの過去の漂着例(スーパーニュース)。フジテレビ, 2000/4/7.
- 松岡耕二: 海洋版GISを用いた南極周極流南側境界周辺の大規模鯨類分布。農林水産省農林技術会議平成10-11年度官民交流共同プロジェクト「海洋版GIS(地理情報システム)開発」成果報告会。遼洋水産研究所, 2000/4/17.
- 松岡耕二: 海洋版GISを用いた南極周極流南側境界周辺の大規模鯨類分布。農林水産省農林技術会議平成10-11年度官民交流共同プロジェクト「海洋版GIS(地理情報システム)開発」成果報告会。中央水産研究所, 2000/4/18.
- 村瀬弘人: GISを用いた南極海におけるヒゲクジラ類とオキアミ類分布関係の予備解析結果と今後の課題。農林水産省農林技術会議平成10-11年度官民交流共同プロジェクト「海洋版GIS(地理情報システム)開発」成果報告会。遼洋水産研究所, 2000/4/17.
- 村瀬弘人: GISを用いた南極海におけるヒゲクジラ類とオキアミ類分布関係の予備解析結果と今後の課題。農林水産省農林技術会議平成10-11年度官民交流共同プロジェクト「海洋版GIS(地理情報システム)開発」成果報告会。中央水産研究所, 2000/4/18.
- 西脇茂利: クジラ救出劇 その後を追う(ウオッ!チャ)。フジテレビ, 2000/4/15.
- 大隅清治: CITESと鯨資源。築地市場内東京都講堂, 2000/2/22.
- 大隅清治: CITESと鯨資源。和田町コミュニティーセンター, 2000/3/2.
- 大隅清治: CITESと鯨資源。仙台市勤労者体育館会議室, 2000/3/9.
- 大隅清治: クジラと人との関わり-クジラを大切にしてきた日本人。港区郷土資料館, 2000/3/11.
- 大隅清治: 人と鯨のかかわり合い。氷見漁協研修室, 2000/3/16.
- 大隅清治: 鯨の跳躍(めざましテレビ)。フジテレビ, 2000/3/22.
- 大隅清治: クジラを巡る最近の話題について考える。アルバトロスクラブ11周年会合, 2000/5/13.
- 田村 力: 早く海へ! クジラ救出は…(ニュースプラス1)。日本テレビ, 2000/4/7.
- 田村 力: 南極海のオキアミを巡る争い-ヒゲクジラ類を中心として-。第33回水産資源管理談話会, 2000/4/24.

[新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・日本語版ホームページ 日本鯨類研究所が開設: 日刊水産経済新聞 2000/3/8.
- ・海の幸に感謝する会 東京タワーでフェス: 日刊水産通信 2000/3/14.
- ・4月29, 30日釧路で公開 南水洋鯨類捕獲調査船団 歓迎する会設立: みなと新聞 2000/3/14.
- ・鯨研が日本語版HPを開設: みなと新聞 2000/3/14.
- ・日本語ホームページを開設 日鯨研: 水産タイムス 2000/3/20.
- ・海の幸フェスティバル 4月1日、東京タワーで: 水産タイムス 2000/3/20.

- ・ 調査船 2 隻が帰港 南大洋鯨類・生態系調査終わる：みなと新聞 2000/3/28.
- ・ 「資源管理に捕鯨必要」 船団入港前にPR：北海道新聞 2000/3/30.
- ・ 調査捕鯨の意義理解を 法、科学的にも正当 ミンククジラ捕獲調査船団来月入港 関係者ら会見 釧路：釧路新聞 2000/3/30.
- ・ 南氷洋のクジラ目視調査船帰港へ きょう長浦港に：日刊水産経済新聞 2000/3/31.
- ・ CITES締約国会議 クジラ 3 種提案 ダウンリスティング 水産庁、日本対応示す：日刊水産経済新聞 2000/4/3.
- ・ 海の幸フェスティバル 1千人が来場 捕鯨・漁業の重要性訴える 便宜置籍船問題も：みなと新聞 2000/4/4.
- ・ 南氷洋調査船団入港へ ミンク発見、過去最高：日刊水産通信 2000/4/4.
- ・ ミンクのひげ、無料配布 海の幸フェス、クジラ試食に長蛇の列：日刊水産経済新聞 2000/4/4.
- ・ 日新丸、6日に釧路入港：日刊水産経済新聞 2000/4/4.
- ・ 南氷洋鯨類調査が終了 過去最多のミンク鯨を確認：みなと新聞 2000/4/5.
- ・ 調査捕鯨船が道内に初寄港 釧路：北海道新聞 2000/4/6.
- ・ 母船「日新丸」が釧路入港 第13次南氷洋鯨類調査 過去最多の7559頭確認：みなと新聞 2000/4/7.
- ・ 捕鯨調査船が初入港 母船「日新丸」など2隻 調査団保護団体の妨害批判 釧路港：釧路新聞 2000/4/7.
- ・ ミンク鯨 計画通り439頭捕獲 南氷洋調査船団が帰港：水産タイムス 2000/4/10.
- ・ 南鯨調査船 日新丸、成果上げ釧路へ 400人出席、盛大に入港式：日刊水産経済新聞 2000/4/11.
- ・ 南鯨調査団 農水相に帰港報告 グリーンピース擁護のN乙首相抗議に感謝：みなと新聞 2000/4/12.
- ・ 南氷洋鯨類調査団が玉沢大臣に帰港報告：日刊水産通信 2000/4/12.
- ・ 規制緩和 VS. 全面禁止 クジラ巡り日米火花 ワシントン条約国会議：朝日新聞 2000/4/12.
- ・ 南鯨調査 鯨類資源は確実に増大 石川団長ら 玉沢大臣に報告：日刊水産経済新聞 2000/4/13.
- ・ 捕鯨解禁へデータで勝負 「頭数は回復」世論へアピール意気込む農水省 ワシントン条約会議：朝日新聞 2000/4/14.
- ・ クジラ規制の緩和 3案否決 ワシントン条約会議：朝日新聞 2000/4/16.
- ・ クジラ 3 種の取引緩和否決 ワシントン条約会議：読売新聞 2000/4/16.
- ・ 第13次南氷洋鯨類調査船団・石川団長「ミンク鯨439頭を採集」玉沢農水大臣に調査結果報告：水産タイムス 2000/4/17.
- ・ 鯨類のダウンリスティング今次会議でも否決 賛成50カ国確保し日本主張は浸透：日刊水産通信 2000/4/18.
- ・ クジラって増えているの？ マッコウ最多200万頭「ミンク」急増：読売新聞 2000/4/18.
- ・ ワシントン条約締約国会議 アフリカゾウ・クジラ問題先送り：朝日新聞 2000/4/25.
- ・ CITES閉幕 鯨類持続的利用に理解浸透：みなと新聞 2000/4/26.
- ・ グリーンピースの調査妨害 一線を越えた行動 石川団長、強い怒り：日刊水産経済新聞 2000/4/27.
- ・ 鯨類捕獲調査船・日新丸を一般公開 29・30日釧路市：日刊水産経済新聞 2000/4/27.
- ・ 大隅・日本鯨類研究所理事長に聞く 新捕鯨構想の目指すもの：日刊水産経済新聞 2000/4/27.
- ・ 5カ月間の調査ねぎらう 日新丸、釧路で初の入港式：日刊水産経済新聞 2000/4/27.
- ・ 鯨類捕獲調査母船「日新丸」道内初、釧路で一般公開：みなと新聞 2000/5/2.
- ・ 鯨類調査 マッコウ、ニタリも対象 政府、IWCに計画提出：みなと新聞 2000/5/10.
- ・ ニタリ50頭、マッコウ10頭捕獲 日本がIWC科学委に提出：日刊水産経済新聞 2000/5/10.
- ・ クジラの船を見に行こう！1万3700人で賑わう：水産タイムス 2000/5/15.
- ・ クジラ肉の戸籍づくり 密漁、密輸もDNAで識別：朝日新聞 2000/5/16.

- ・築地市場内で IWCへの対応説明 大日本水産会と日本捕鯨協会：みなと新聞 2000/5/24.
- ・水産庁 調査捕鯨に2種追加 今夏実施目指す 反捕鯨国の反発必至：読売新聞 2000/5/25.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・第13次南水洋鯨類捕獲調査船団 下関より全船一斉出港：勇魚通信 2000/3.
- ・グリーンピースが調査船団を妨害 母船に追突、度重なる暴挙に怒りの声：勇魚通信 2000/3.
- ・4月の第11回ワシントン条約締約国会議へ 日本政府が鯨類ダウンリスティングを提案：勇魚通信 2000/3.
- ・新コミッショナーに森本水産庁次長 前任者 島氏の路線引き継ぐ方針：勇魚通信 2000/3.
- ・勇魚Q&A 南水洋の鯨類捕獲調査で何を調べているのですか？：勇魚通信 2000/3.
- ・捕鯨再開へ向け 守勢から攻勢へ 大隅鯨研理事長語る：水産界 2000/3/1.
- ・GP、日新丸の調査妨害：水産界 2000/3/1.
- ・BOOK (新刊紹介) 図説 水産概要 村上光由著：水産世界 2000/3/15.
- ・海の幸フェス、明日開催：大水ニュースレター 2000/3/31.
- ・くじらの船を見に行こう！：広報くしろ 2000/4/1.
- ・鯨捕獲調査船団を一般公開：大水ニュースレター 2000/4/7.
- ・ニュースの周辺 科学的根拠の前に反論の余地失うGP：水産週報 2000/4/15.
- ・日鯨研HP開設：水産週報 2000/4/15.
- ・これは事件だ 神足裕司のニュースコラム 生態系を守るために、鯨は捕って食わねばならんのだ：週刊SPA！ 2000/5/17.

京きな魚 (編集後記)

本号が皆様のお手元に届く頃は、アデレード市内での第52回IWC年次会合の真最中です。鯨資源の合理的利用を検討するはずのIWC内で、資源の如何を問わず捕鯨を認める積もりはないと公言して憚らない豪州政府の膝元での会合ですから、どのように進展していることになるのやら……。

『鯨研通信』に初めて登場する話題と思いますが、岩崎・グッドマン・まさみさんに頼んで、アイヌ民族の捕鯨を紹介する記事を纏めて貰いました。岩崎さんは嘗て、モラトリアムが及ぼす沿岸捕鯨地域社会での文化・経済的影響について調査・研究をされたことがあり、日本代表団のメンバーとしてIWC会合にも出席しておられました。ところで、本誌404号に掲載した「反捕鯨主義のまやかしとその罪」の著者であ

るダン・グッドマン氏も長い間カナダ政府代表としてIWC会議に出席しておりました。お二人の出合いがIWCから始まったのは確かなはずで

す。前号で計量魚探による調査活動を報告しましたが、今回は捕獲調査航海で実施しております海洋観測活動について紹介させていただきました。上手な資源管理のためには生存量や加入量の情報が重視されがちですが、鯨類の生活環境としての海洋構造の把握も大切な仕事です。同じ時期に同じ海域で同じ規模によって繰り返されるJARPAは、鯨類の分布や餌の情報が同時に入手できることも手伝って、地球環境のモニタリングにも寄与するはずだと思っております。

(山村和夫)

登録番号	和名	群	種	都道府県	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物種	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-763	ワカサギ	A	1	東京都	港区六本木一丁目 六本木	19991120	港内迷入	生存			小林博	しながわ水族館		無し	11/20に発見後、11/23 13:30に江東区新木場1号地貯水場に入。消防庁のワカサギが追い出しを要するが失敗。VTRあり(しながわ水族館)。新聞記事(読売/朝日991121,東京991216)。他報告者:山田格(国立科学博物館、清永裕子(日経新聞))
0-764	ワカサギ	A	20	神奈川県	東条郡那智郡 湘町大字字久井	19991125	混獲(大型定置網)	死亡	5.40	子連れを含む。	宇久井漁業同組合			脂皮・筋(日経新聞)	新着標本発見。他報告者:日経新聞DNA鑑定で種判定(後藤隆夫)。
0-767	ワカサギ	C	1	鹿児島県	日置郡東市来町 江口岬	19991204	漂着	死亡	1.73	腐敗。白骨化。詳細計測値一部あり。	久保隆彦	かとしま水族館		無し	10:00-14:00頃観察。少少とも20匹を越える群が遊泳。衰弱個体は観察されず。1204にも目撃情報があったが発見できず。VTRあり(日経新聞)。
0-768	ワカサギ	B	1	愛知県	瀬戸市三谷町 三谷(三河湾)	19991211	漂着	死亡	1.45	詳細計測値あり。	菊池浩二	下外		無し	14:00発見。他報告者:清永裕子(日経新聞)。新聞記事(朝日991211)。
0-769	ワカサギ	B	1	山口県	厚狭郡山崎町 厚狭生島	19991218	漂着	死亡	1.71	腐敗。体長約50cm。	山田格	国立科学博物館		無し	VTRあり(下関AQ)。
0-770	ワカサギ	B	1	三重県	四日市市三郎町 中部電力火力発電所 電所排水口付近(伊勢湾)	19991218	漂着	死亡	1.71	腐敗。体長約100cm。	大地隆也	高知大学		無し	全身冷凍(下関水産学館)。
0-771	ワカサギ	A	1	新潟県	両津市大字鷺崎	19991220	混獲(大型定置網)	生存→死亡			野田栄吉	三國大学生物学部		無し	報告者は991220調査。接近できず放置。
0-775	ワカサギ	A	1	愛媛県	越智郡魚崎町 木海岸(魚崎)	20000105	漂着	死亡	1.20	腐敗。詳細計測値一部あり。	千葉真佐	愛媛県今治地方高水産試験場		無し	14:00頃須賀港沖で発見。他報告者:其徳克則(内海府漁協)。日経新聞DNA鑑定で種判定(後藤隆夫)。
0-776	ワカサギ	A	1	北海道	東条郡那智郡 小樽市蘇我	20000107	混獲(定置網)	死亡	5.40	詳細計測値一部あり。	中地良樹	北海大学畜産学部		無し	14:00頃須賀港沖で発見。他報告者:991220調査。接近できず放置。
0-776	ワカサギ	A	1	北海道	小樽市蘇我	20000107	混獲(定置網)	死亡	4.80	体長は約10cm。記載に上る。	木村方一	北海大学教育大学札幌校		無し	14:00頃須賀港沖で発見。他報告者:991220調査。接近できず放置。
0-776	ワカサギ	C	1	鹿児島県	肝崎郡高山町 肝崎(志布志湾)	20000112	混獲(定置網)	生存→死亡			高山町漁業同組合			無し	8:30AM発見。船から逃がした。獲名は種定。

